
置き傘

コワバ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

置き傘

【Nコード】

N1820H

【作者名】

コワバ

【あらすじ】

雨続きで憂鬱としていた少女が奇怪な謎に巻き込まれていく。

梅雨に入ると制服が体に纏わりついて衣替えをしてもちっとも涼しさを感じられない。毎日傘をさして学校に行かなければならないし、風が強い日なんか学校に着く頃にはずぶ濡れになるときもある。

私は梅雨が嫌いだ。

花が美しく咲く春と虫たちが騒ぎ出す夏、その間にあるただ雨が降り続けるだけの梅雨という季節は常に私を憂鬱にする。

今日もいつものように雨が強く降っていた。学校に着くと靴下や靴はもちろんぐちゃぐちゃに濡れ、ひどいことに被害は制服にまで及んでいた。今日一日この服で授業を受けるのかと思うとほんと嫌になる。

持っていた小さなハンカチで濡れた部分の応急処置をしてから教室に向かった。

教室の中も湿度が高くて気分が悪かった。だらしない男子はワイシャツのボタンをはずして下敷きをうちわ代わりに仰いでいた。

私は席に着いて、朝のホームルームを待った。窓を見ると雨脚はさつきよりも強くなっていた。

ホームルームが始まる十分前ぐらいに、突然さっきのだからしない男子生徒が騒ぎ声が聞こえた。見ると数人の女子と他の男子も加わっていた。

「ありえないだろ」

「ほんとなんだって、この学校の七不思議の一つに入ってるぐらいなんだよ」

「そういうの神隠しっていうんだっけ？」

「単純にそうとも言えるわね。この学校にいないはずの生徒の痕跡も見つかってる。間違いないよ」

「嘘だあ」

男子生徒全員が笑っているのが見えた。女子のほうの名前は覚え

てる。確かクラス委員の宮内さんだったっけ。あ、集団の中に千夏もいる。

私は千夏を呼びつけてなんの話をしているのか訊いてみた。

「なんかね、置き傘で神隠しなの」

「それじゃ、わからないわよ」

宮内さんが乱暴な口調で千夏に言った。そのまま私の方を向いて説明を加える。

「この学校の七不思議は知ってる？」

「知らなかった。そんなのあるんだ」

「まあいいわ。その中の一つに人喰い傘っていうのがあってね。毎年梅雨の時期に現れるんだけど、学校の傘立てがいつぱいになるこの時期に傘立てに紛れ込んで傘を開いた人を食べるらしいの。その人の存在ごとね」

「存在ごとって？」

「神隠しに存在認識が加わったかんじね。存在ごとその人が消えてしまふの」

「なんか怖いね」

「でね、このクラスの人がすでに被害に遭ってるんじゃないかって私は疑っているの」

「え、このクラスって。誰も減ってないじゃない」

「さつきも言ったでしょ？ 存在が消えてしまふのよ。だから私たちには消えたことが認識されないわけ。だけどね、私は前に内村って人の痕跡みたいなのを見つけたの」

「どこに？」

「掃除用のロッカーの中に消えかけた文字で内村って書いてある雑巾があったの。以前ポロ雑巾をクラスで集めたことあったじゃない？ 多分そのときのものよ。そのときは内村って人がいたんだわ」

「なんか信憑性にかけるな」

私のこの一言が宮内さんを怒らせてしまったが、すぐに先生が来て助かった。

実際に私は七不思議なんてばかばかしいと思っている。そんなもの、学校を面白くするために誰かが流した噂にすぎないのだから。今日の放課後までは確かにそう思っていた。

コンビニとかで売っているような透明色のビニール傘だった。ビニールの部分は纏められてボタンで留められている。とても今朝使ったとは思えなかった。そう思わせたのは手元の部分を先に見てしまったからなのかもしれない。

「内村」

思わずその名前を呟く。

傘の手元にはマジックのようなもので、内村と書いてあった。

私は傘を手にとった。長細く綺麗な傘で人を魅了するような力を秘めているようにも感じた。

傘を纏めるボタンをはずし、開閉ボタンがないので手元の上のはじきの部分に手を掛ける。

しかし、そこで私は広げるのをやめた。

広げようとした瞬間、傘立てから私の傘がずれ落ち、地面に転がったのが見えた。傘立ての下からずれ落ちたのだが、不自然な落ち方をしたようにも思えた。

私は内村と書かれた傘を戻し、自分の傘を拾い上げた。

「人の傘を盗んじゃ駄目だよ」

独り言をそつと呟いて、私は下校した。

翌日、相変わらず雨が降っていて憂鬱な気分で登校した。教室に入るとクラス委員の千夏がなにやら騒ぎ立てている。

「ほんとなんだって、この学校の七不思議の一つに入ってるぐらいなんだよ」

「嘘だあ」

ワイシャツをだらしなく着ている男子生徒が千夏を笑っている。

私は千夏の近くにいた鈴子を呼び出し話を聞いた。

「私もよくわからないんだけど神隠しがどうのこうのって千夏ちゃんか」

「鈴子ちゃん。それじゃわからないよ」

千夏は私の前に来て懇切丁寧に説明してくれた。なにやら、梅雨の時期に人喰い傘というのが現われて傘を開いた生徒を存在ごと食べってしまうらしい。

「ほんとだよ。私、掃除用のロッカーの中で宮内って人の雑巾見つけたんだから。きつとこの間の雑巾集めをしたときのものだよ。そのときは宮内って人いたんだよ」

千夏が必死に私に説明していた。

七不思議なんてどうでもいい私は適当にあしらった。

「なんか信憑性にかけるな」

千夏は激しく激怒しどこかで聞いたようなセリフを口にした。

「もう、いいよ。私が絶対この謎を解いてやるんだから！」

ちようどそのとき、先生がやって来て助かった。千夏は怒ったまま席に戻っていった。

雨は今日も降り続けている。早く初夏が訪れてほしい。そうすれば、こんな馬鹿げた話も終わるのだから。

(後書き)

「置き傘」を読んでいただきありがとうございます。

本作品についての感想や意見、またあなたが考えた今後の展開などがあったらぜひ書きこんでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1820h/>

置き傘

2010年10月8日15時57分発行